

ミラレーパの教示法

——レーチュンパとの歌の応酬を中心に——

渡邊 温子

1 はじめに

尊者ミラレーパ (Mi la ras pa bZhad pa'i rdo rje, 1040–1123) はチベットにおいて宗派の垣根を越え、今なお人々の信仰と尊敬を集め続ける行者である。彼の師であるマルパ (Mar pa Chos kyi blo gros, 1002–1097) はインドとネパールに赴き、ナーローパ (Nāropa, 1012/1016–1100) やマイトリーパ (Maitrīpāda, 1002–1077) を初めとする多くの密教行者たちから教えを授かりチベットへともたらした。ミラレーパはマルパのもとで築城作業を初めとする苦行を行じた末に教えを授かり、修習に励んだ。ミラレーパがマルパのもとで行なった苦行の逸話はチベットでは知らぬ者はいないほど有名である。

ミラレーパは生涯僧院に属することなく、食は粗食にして衣は一枚の麻布を纏い、寂静処を遊行して多くの所化にグル (mgur) と呼ばれる宗教歌をうたい聞かせた⁽¹⁾。ミラレーパは自身の仏教の理解を歌にうたったが、それらはどれも彼の内的体験に根ざしているため、体系的に捉えることは難しい上、ミラレーパは自身の歌を書物で書き残すことはなかった。そのため、ミラレーパの仏教理解がどのようなものであったかを知るためには、弟子たちによって編纂された書物に頼らなければならない。

ミラレーパは西チベットからネパールの国境付近の地域を遊行し、多くの弟子に教えを授けた。その中でも最も優れた弟子は、太陽と月とに並び称されるガムポパ (sGam po pa bSod nams rin chen, 1079–1153) とレーチュンパ (Ras chung pa rDo rje grags pa, 1085–1161) の二大弟子である。ガムポパは医者 (lha rje) の呼び名が冠せられるように、もともと医者の家系に生まれたが、子と妻との相次ぐ死別によって無常を感じ、俗世間を捨て出家の道を選んだ。カダムの教えを学び、顕教を修めた後、老年のミラレーパに師事して大印契など密教の教えを授かった。ガムポパとミラレーパとのやり取りの経緯は、ツァンニョン・ヘールカ (gTsang smon he ru ka Ru pa'i rgyan can, 1452–1507)⁽²⁾の編纂した『ミラレーパの十万歌』(以下『十万歌』)の「聖者ガムポパの章」に詳しい。ツァンニョンの『十万歌』によると、その教えは、ルン (rlung) やティクレ (thig le) の瞑想法など、具体的な密教の実践についてであった⁽³⁾。

一方、レーチュンパは幼少の頃よりミラレーパに付き従って仏教を学んだ⁽⁴⁾。ミラレーパは幼い頃に父を亡くし、母と妹と三人、親戚による責苦に耐えなければならなかった。スタン氏も指摘するように、7才の時に父を亡くし、実母とその再婚相手の義父から虐待されるというレーチュンパの生い立ちは、幼くして父を亡くしたために、親族からの虐待に苦しんだミラレーパの

人生と類似している（スタン 1993, 108）。幼きレーチュンパは経を読誦することによって布施を集め家庭を助けていたが、11歳になった時、ララ（ra la）のプサオク洞窟（phu za 'og phug）でミラレーパの歌を聞いて信仰するに至り、彼に師事した（『レーチュンパ伝』13；『十万歌』38b）。レーチュンパは初めミラレーパのもとで仏教を学び、その後、更なる教えを求めて自らインドまで足を運んだ。レーチュンパはティプパ（Tipupa）などインドの行者から教えを授かり、「無身ダーキニーの法類（lus med mkha' 'gro'i chos skor）」を始めとする教えを師ミラレーパへと伝えた⁽⁵⁾。また、ツァンニョンの編纂した『ミラレーパ伝』では、レーチュンパがミラレーパに彼の偉業を尋ね、それにミラレーパが答えて自伝を語るという形式で話が進行する⁽⁶⁾。

本稿ではレーチュンパに焦点を合わせ、ツァンニョン・ヘールカの編纂した『十万歌』の「タキヤドジェゾンの話 後編（brag skya rdo rje rdzong gi skor tsho phyi ma）」に見られる、ミラレーパとレーチュンパの歌の応酬を分析することを通して、ミラレーパの弟子に対する教示法がどのようなものであったのかを明らかにするとともに、ミラレーパ自身の仏教理解の一端を確認したい⁽⁷⁾。

2 ミラレーパとレーチュンパの歌のやり取り

『十万歌』には、いくつかの細かい章分けが見られる。これら、もともとは別に存在していた話を、ツァンニョンが一つの物語に編纂しなおしたと思われる⁽⁸⁾。ツァンニョンよりも150年ほど前に活躍した、カルマパ五世ランジュン・ドルジェ（Karma pa Rang byung rdo rje, 1284–1339）の編纂した『ゾーナクマ（*rnal 'byor gyi dbang phyug mi la bzhad pa rjo rje'i gsung mgyur mdzod nag ma*）』にも章分けは見られるが、ツァンニョンのものとは分類、内容、名前がそれぞれ異なる。

レーチュンパは『十万歌』の多くの話に登場する。これはガムボパが「聖者ガムボパの話」と、もう一つの歌の場面で登場するだけであるのとは対照的である。レーチュンパとミラレーパの間で交わされた歌を大別すると、

- ・日常の挨拶などがうたわれた歌
- ・レーチュンパの過ちを諷めるためにうたわれた歌
- ・レーチュンパの仏教理解を深めさせるためにうたわれた歌

の三つに分けることが出来る。

レーチュンパはミラレーパにとって、決して物わかりのよい弟子であったとは言えない。そのため、レーチュンパに対してミラレーパがうたった歌の中には、レーチュンパの傲慢を諷めることを目的としてうたわれた歌が多く見られる。レーチュンパは度々師の命令に背いた上、自身の我を通しインドや中央チベットへと旅立っていった。レーチュンパはミラレーパの命に背いたがために、来世で輪廻から解脱することは出来ず、再び三度生を受けるとミラレーパから予言された⁽⁹⁾。

2.1 要点を見失ったレーチュンパ

「タキヤドジェゾンの話 後編」は、レーチュンパがインドに赴く以前、ミラレーパのもとで

—ミラレーパの教示法—

修行に励んでいた時の話である。この話の中でミラレーパは、体験的な歌の応酬を通して、自身の愛弟子であるレーチュンパの仏教理解を促した。このようなやり取りは、その歌を聞く他の者にもその内容が理解されやすくなっている。しかし、これとほぼ同じエピソードが『ゾーナクマ』にもみられることから、このような話の演出は少なくともツァンニョンが創作したものではない⁽¹⁰⁾。他には「諸々の話の中で、弟子と信者との受け答えの話 (kha 'thor sna tshogs kyi skor las bu slob dang nya ma'i zhus lan gyi skor)」にも、三門についての歌のやり取りを通してレーチュンパの理解を深めさせる場面がみられるが、歌の分量が短く、またその歌と歌との対応関係がわかりにくい（『十万歌』207a-207b）。タキヤドジェゾンの話に見られる歌は、仏教全体の目指すべきものが述べられ、思想的ドラマが見られる非常に特徴的な歌である。

ミラレーパはまず、レーチュンパにどのような厭離の体験と証解 (skyo shas dang nges 'byung nyams dang rtogs pa) があるのかを確認するために「過失多き、12の欺かれ得るもの (rkyon mang du slu slu 'dra bcu gnyi)⁽¹¹⁾」を歌にうたった。この歌は二句十二連からなるが、一句目で世間の法や財産、妄分別や未了義など、欺くものについてうたった後、二句目では一句目の項目によって自身は欺かれない行いをとるとうたう。

この歌を聞いたレーチュンパは、「仏そのものであられるラマに、欺く法は全くないに決まっている。私や実践する能力のない者たちの過失をお考えになっておっしゃられているのだ」（『十万歌』85a)⁽¹²⁾と考えて、見解、修習、行 (lta sgom spyod) の要点をまとめて歌 (A) にうたった。

A0

父、ラマ尊者よ、お聞きください
私、愚者のこの知の情けなさ
慈悲の投輪で捉えてください

pha bla ma rje btsun snyan gson dang//
bdag rmongs pa'i blo 'di yi re mug//
thugs rje zhags pas gzung du gsol//

A1

常断の二辺の境目で
辺を離れた見解を失ってしまい
存在の実相を決定できません

rtag chad gnyis kyi so mtshams su//
mtha' bral lta ba stor te thal//
gnas lugs gtan la ma phebs so//

A2

昏沈と掉挙の二つの境目で
楽としての光明の修習を失ってしまい
執着をやめることを望みません

bying rgod gnyis kyi so mtshams su//
bde gsal sgom pa stor te thal//
zhen pa bzlog tu ma 'dod do//

A3

取捨の二つの境目で
自然とわきあがる行を失ってしまい
迷乱を減することを望みません

blang dor gnyis kyi so mtshams su//
shugs 'byung spyod pa stor te thal//
'khrul ba 'jig tu ma 'dod do//

——ミラレーパの教示法——

A4

諂と誑の二つの境目で
清浄なる三昧耶戒を失ってしまい
諂誑が静まりません

zol zog gnyis kyi so mtshams su//
rnam dag dam tshig stor te thal//
g.yo sgyu cham la ma phebs so//

A5

輪廻と涅槃の二つの境目で
自らの心が仏であるということを失ってしまい

'khor 'das gnyis kyi so mtshams su//

法身を悟ることを望みません

rang sems sangs rgyas stor te thal//
chos sku rtogs su ma 'dod do//

A6

希望と疑いの二つの境目で
仏果である四身を失ってしまい
自らの心の本性を自分で知りません

re dogs gnyis kyi so mtshams su//
'bras bu sku bzhi stor te thal//
rang ngo rang gis ma shes so//

A7

父、ラマ尊者リンポチェ
以前も恩と慈悲で護ってくださいました
今また離れることなくお護りください

pha bla ma rje btsun rin po che//
sngar yang bka' drin thugs rjes bskyangs//
da dung 'bral med bskyab tu gsol//

ミラレーパはレーチュンパの厭離について確認しようとしたが、レーチュンパはそれには直接答えずに自身の見解、修習、行の要点をまとめてうたった。この歌は、常辺と断辺、昏沈と掉挙など二つの項に挟まれて、本来のあるべき正しい状態を見失い、そうすることが出来なくなってしまう自身の状態についてうたっている。ここでレーチュンパは所断の状態を理解していることから、彼は正しい状態が何であるのかということに対して迷っているのではなく、それが正しい状態であると知りながら、そのように実際に行なうことの出来ない自身の現状についてうたっている。

2.2 レーチュンパの不完全な理解

Aの歌を聞いたミラレーパは、レーチュンパにはAの歌以外の体験と証悟が有るはずだから、隠さず素直に話すようにと促す。そのようなラマの言葉を聞いた途端に、レーチュンパの体験は増大して、彼は再び「七つの獲得 (rnyed pa bdun)」(B)をうたった。

B0

父、ラマ尊者の恩によって
七つの獲得の意味を理解しました

pha bla ma rje btsun bka' drin gyis//
rnyed pa bdun gyi don zhig rtogs//

—ミラレーパの教示法—

B1

現れの中から空を獲得し snang ba'i nang nas stong pa rnyed//
 もう事物が存在すると思いません da dngos po yod snyam mi bgyid do//

B2

空の中から法身を獲得し stong pa'i nang nas chos sku rnyed//
 もう精進があると思いません da bya rtsol yod snyam mi bgyid do//

B3

種々なる物の中から不二を獲得し sna tshogs nang nas gnyis med rnyed//
 もう離合集散があると思いません da 'du 'bral yod snyam mi bgyid do//

B4

白と赤の中から平等性を獲得し dkar dmar nang nas mnyam nyid rnyed//
 もう〔何かを〕否定し肯定することがあると思いません
 da dgag sgrub yod snyam mi bgyid do//

B5

幻身の中から大樂を獲得し sgyu lus nang nas bde chen rnyed//
 もう苦しみがあると思いません da sdug bsngal yod snyam mi bgyid do//

B6

世俗の中から勝義を獲得し kun rdzob nang nas don dam rnyed//
 もう迷乱があると思いません da 'khrul ba yod snyam mi bgyid do//

B7

自らの心の中から仏を獲得し rang sems nang nas sangs rgyas rnyed//
 もう輪廻があると思いません da 'khor ba yod snyam mi bgyid do//

B0で述べている通り、先のAの歌に対してミラレーパがAの歌以外の理解があるはずだと指摘したことによって、レーチュンパはBの歌にうたわれている理解を得た。Aでは正しいあり方を知りながらも、そうすることの出来ない自身の状態についてうたっていたのに対し、Bでは事物や精進など、様々な否定対象があるとは思わないとうたう。

この歌はそれぞれ二句から成っているが、一句と二句の関係は、まず「現れの中から空」「空の中から法身」というように、前者の中から後者を獲得する関係である。そして二句目は、一句目のうち前者に関連しているものの存在を否定する、という関係になっている。ここではまだ、ある対象と、そこから獲得されるものという二項の対立が存在する。また、二句目ではあるものの存在を否定するが、そこではまだ存在非存在の概念に捕われている。

—ミラレーパの教示法—

Bの歌に対してミラレーパは、レーチュンパが修習する体験の向かっている道はほぼ合っているが、真なるものではないと評価を下す。

2.3 ミラレーパの指摘

上記のような歌をうたったレーチュンパに対し、ミラレーパは真なる修習の体験を示すために、今度は自ら「八つの通暁 (klong gyur brgyad)」(C) についてうたった。

C1

現れと空の区別がなくなれば
見解に通暁したのだ

snang dang stong pa dbyer med na//
lta ba klong du gyur pa yin//

C2

夢と昼の区別がなくなれば
修習に通暁したのだ

rmi lam nyin par khyad med na//
sgom pa klong du gyur pa yin//

C3

楽と空の区別がなくなれば
行に通暁したのだ

bde dang stong pa khyad med na//
spyod pa klong du gyur pa yin//

C4

今生と来世の区別がなくなれば
存在の実相に通暁したのだ

'di dang phyi ma khyad med na//
gnas lugs klong du gyur pa yin//

C5

心と虚空の区別がなくなれば
法身に通暁したのだ

sems dang nam mkha' khyad med na//
chos sku klong du gyur pa yin//

C6

喜びと苦しみの二つに区別がなくなれば
教誡に通暁したのだ

skyid sdug gnyis po khyad med na//
gdams ngag klong du gyur pa yin//

C7

煩惱と智慧の区別がなくなれば
全ての証悟に通暁したのだ

nyon mongs ye shes khyad med na//
rtogs tshad klong du gyur pa yin//

C8

自らの心と仏の区別がなくなれば
仏果に通暁したのだ

rang sems sangs rgyas khyad med na//
'bras bu klong du gyur pa yin//

—ミラレーパの教示法—

Aの歌でレーチュンパは「二つの境目」と否定すべき二つの項目を完全に分けて考えていた。次のBの歌に至っても、未だ二項の対立の中で物事を考えていたのに対し、ミラレーパは二つのもの間に区別や違いがなくなることによって、それぞれ、見解、修習、行、存在の実相、法身、教誡、証悟、仏果に通暁することをうたう。

2.4 レーチュンパの正しい理解

ミラレーパの歌をうけて、レーチュンパの証悟は次第に進み、彼の心の実践の究極の証悟を、「六つの中有 (bar do drug) (D)」という歌にまとめてミラレーパに捧げた。

D0

尊者ラマたちに礼拝します

rje bla ma rnams la phyag 'tshal lo//

D1

続いて、現れと空の二つの中有に
常断の見解は対象として無い
妄分別の学説を私は持たない
今や、無生は慧を越えている
これが乞食である私の見解です
悟った友が集おうとも害されません

yang snang stong gnyis kyi bar do na//
rtag chad kyi lta ba yul na med//
rnam rtog gi grub mtha' ngas mi 'dzin//
da lta skye med blo las 'das//
'di ldom bu ba bdag gi lta ba lags//
grogs rtogs ldan 'tshogs kyang gnong rgyu
med//

D2

楽と空の二つの中有に
瞑想の対象の相続は対象として無い
苦行に心を持することを私はしない
散乱せず等至に入る
これが乞食である私の修習です
体験を有す友が集おうとも害されません

bde stong gnyis kyi bar do na//
zhi gnas kyi dmigs rgyun yul na med//
sdug btsir gyi sems 'dzin ngas mi byed//
ma yengs gnyug ma'i ngang du 'jog//
'di ldom bu ba bdag gi sgom pa lags//
grogs nyams myong can 'tshogs kyang gnong
rgyu med//

D3

有貪と離貪の中有に
有漏の楽は対象として無い
人を欺くような邪命を私はしない
今や何であれ現れたものは友として立ち昇る
これが乞食である私の行です
瑜伽行者の友が集おうとも害されません

chags can chags bral bar do na//
zag bcas kyi bde ba yul na med//
tshul 'chos kyis log 'tsho ngas mi sgrub//
da lta ci snang grogs su shar//
'di ldom bu ba bdag gi spyod pa lags//
grogs rnal 'byor 'tshogs kyang gnong rgyu
med//

—ミラレーパの教示法—

D4

有過失と無過失の中有に
 清浄と不浄は無い
 詐欺を私はしない
 今や、自らの心を証人にたてる
 これが乞食である私の三昧耶戒です
 戒を有す友が集おうとも害されません

skyon can skyon med bar do na//
 rnam par dag dang ma dag med//
 g.yo sgyu zol zog ngas mi byed//
 da lda rang sems dpang du 'dzugs//
 'di ldom bu ba bdag gi dam tshig lags//
 grogs khirms ldan 'tshogs kyang gnong rgyu
 med//

D5

輪廻と涅槃の中有に
 仏と有情は二つとして無い
 希望と疑いの果を私は欲さない
 今や、苦しみが楽として立ち昇る
 これが乞食である私の果です
 成道者の友が集おうとも害されません

'khor 'das gnyis kyi bar do na//
 sangs rgyas sems can gnyis su med//
 re dogs 'bras bu ngas mi 'dod//
 da lta sdug bsngal bde bar shar//
 'di ldom bu ba bdag gi 'bras bu lags//
 grogs grub thob 'tshogs kyang gnong rgyu
 med//

D6

言葉と意味の二つの中有には
 学者の言説は対象として無い
 疑うことを私はしない
 今や、現れうる全てのものが法身として立ち昇る

tshig don gnyis kyi bar do na//
 mkhas pa'i tha snyad yul na med//
 the tshom som nyi ngas mi byed//

これが乞食である私の悟りです
 智慧ある友が集おうとも害されません

da lta snang srid chos skur shar//
 'di ldom bu ba bdag gi rtogs pa lags//
 grogs shes ldan 'tshogs kyang gnong rgyu
 med//

Dの歌の一句では、「現れと空」「楽と空」など、二つの対象の中有⁽¹³⁾がうたわれる。ここで述べられる中有という言葉は、Cの「区別がなくなれば」というミラレーパの言葉を受けているため、ある対象と対象の間に区別がなくなり、両者が包括されてしまっている状態を指しているものと思われる。もし、bar doという言葉は、本来の「あるものとあるものの間、境目」の意味でとってしまうと、Aの歌のso mtshamsと区別が付かなくなってしまう⁽¹⁴⁾。ここでの「中有」という言葉は「中道」と同様に、差別を越えた無差別の境地について述べており、区別を撤廃して同じ境地に立つ、というような意味ではない。次の二句では一句目でうたった二つの対象に関係するものの存在を否定する。D4以外のうたでは「対象として」あるいはD5のように「二つとして」という限定が付く。しかし、D4だけそのような限定がないが、恐らくは歌の語彙数の問題であり、意味としては「二つとして」の限定を付けた方がよいと思われる⁽¹⁵⁾。三

—ミラレーパの教示法—

句は一句と二句の結果、上句に関係する行動を行うことを否定する。四句では上の三句が自らの見解や修習などに対する理解であると述べ、最後の五句では上三句に関連した友が集まろうとも、それによって害されることがないとうたう。

以下それぞれの歌の対応と特徴を確認したい。

1) ACD がほぼそのまま対応

- ・ 1 句目はすべて見解について。A1 の常断の二辺も見解についてだが、ここでは偏見に陥っている。常見は空によって、断見は現れによってそれぞれ否定される。
- ・ 2 句目は、B2 を除いて修習についてであるが、B2 の精進は修習に関係する可能性がある。
- ・ 3 句目は、B3 を除いて行についてである⁽¹⁶⁾。

2) 繰返される単語

- ・ 現れと空：B1, C1, D1
- ・ 楽と空：C3, D2
- ※ B2 の「空と法身」も関係する可能性がある。
- ・ 法身：A5, B2, C5, D6
- ・ 自らの心：A6, B7, C8
- ・ 自らの心と仏：B7, C8

3) 世俗のものと勝義のもの

- ・ 輪廻と涅槃：A5, C5
- ・ 現れと空：B1, C1, D1
- ・ 世俗と勝義：B6
- ・ 煩惱と智慧：C7

4) 同一レベルでの対立

- ・ 白と赤：B4
- ・ 今生と来世：C4
- ・ 歎びと苦しみ：C6
- ・ 楽と苦：D5 (≒ C6)

ミラレーパはこれらの体験的な歌の応酬を通して、レーチュンパの仏教理解を発展させる。まず、ミラレーパの質問に対し、A でレーチュンパは見解、修習、行の要点についてといいながら、修行の要点を確定できない自身の現状についてうたった。歌の中で so mtshams という言葉を用い、ある二つの事象の境目というように、ある事象と事象を別々の事柄として区別してしまっていた。A のようなレーチュンパの歌に対してミラレーパが、レーチュンパには要点が確定できないというだけではなく、他の理解があるはずだと指摘したことによって、レーチュンパは再び B の歌をうたう。しかし、B の歌の段階では、ある事象からある事象を獲得し、そこからある事象の存在を否定するという関係であった。そこには対象 a とそこから獲得される

—ミラレーパの教示法—

対象 b, そして否定される対象 c というように, それぞれを異なった事物として捉えて分別しているためまだ不完全である。そこでミラレーパが C の歌をうたい, 二つの項目に区別がなくなるといふ分別のない状態によってこそ, ある事象を理解すると指摘して, レーチュンパの過ちを指摘する。分別を否定するミラレーパの歌を聞いたレーチュンパは, 教えを正しく理解し, D の歌をうたった。D の歌は事象 a と事象 b の中有に事象 c が, 対象あるいは二つとしてあることを否定し, 差別を越えた無差別の境地としての中有の状態について述べている。C の歌でミラレーパが dbyer med, もしくは khyad med とうたっていたのをレーチュンパは更に D の歌で bar do という言葉にうたい直す。このような積極的, 発展的な歌の問答を通じて, 差別的な見方を越えた無差別の状態をミラレーパはレーチュンパに理解させようとしたのだろう。

3 ミラレーパの意図

以上のような歌の応酬の後, ミラレーパは次のようにレーチュンパに述べた。

「レーチュンパよ, 正しい体験というのはそれだ。器である弟子というのもお前のことを言うのだ。ラマを喜ばせる方法は 3 つ⁽¹⁷⁾ がある。まず信仰と智慧によってラマを喜ばせる。次に聞思の入り口を違えることなく大乘の密教の門に入り, 実践に精進して修習したことによって〔喜ばせる〕。最後に優れた体験と証悟が順次生じることによって〔ラマを喜ばせるのだ〕(『十万歌』 86a-86b)⁽¹⁸⁾」

レーチュンパはミラレーパ同様, 実父を幼い頃に亡くしたが, もともと聡かった彼は経を誦読し, 布施を集めて父母を助けていた。しかしミラレーパの歌を偶然耳にして彼を信仰するに至り, レーチュンパは母と義父のもとを離れてミラレーパに師事した。彼はミラレーパから教えを授かり, 密教を学んで修習に励んだ。その後, インドまで求法の旅にも出るが, タキヤ・ドジェゾンでのやり取りに見られるように, ミラレーパとの歌のやり取りを通して, 体験と証悟を徐々に生じさせた。

先ほどの言葉に続けてミラレーパはレーチュンパに対し,

「さあ, 口でしゃべった〔だけの〕言の葉を喜ぶのではなく⁽¹⁹⁾, 〔言葉の真の〕意味を実践するために, 〔何であれ〕生じた限りの全てのもので心を内に向けて修習しなさい。私に対してもラマ・マルパは, 『経やタントラを多く知らずともよい。言説を追いかけることなく, 心を内に向けてラマが説かれた一切の如くに修習せよ』とおっしゃられた。それら諸々のすぐれた教えを忘れず実践したため, 輪廻に対する厭離とこれらの功德が心に生じたのだ。お前も我がラマ・マルパが説かれた如く行いなさい(『十万歌』 86b)⁽²⁰⁾」

とレーチュンパに述べる。ミラレーパは論理学や問答など言葉の論争に耽ることなく, 修習を修行の中心に置くようレーチュンパに促している⁽²¹⁾。

先にうたわれた歌は, 仏教を学んだことのある者ならば, 誰でもわかる平易な単語を用いてうたわれた歌ばかりである。これらの歌を通して, ミラレーパはレーチュンパに何か新しい仏教の言葉や概念を教え込もうとしたのではなく, むしろ慣れ親しんでいる仏教の言葉を置き換

え発展させていく中で、レーチュンパの仏教理解の成熟を図った。ミラレーパ自身、議論や問答を通して仏教理解を深めたのではなく、マルパから授かった教えを苦行の中で修習することによって深い悟りを獲得し、そしてそこから得た自身の体験的理解を多くの歌にうたって所化たちを教化したのである。

4 おわりに

レーチュンパは幼い頃からミラレーパに師事し、後に渡印して教えを授かることはあったものの、その教えの基礎はミラレーパに負っている。またカダム派の顕教を修め終わった後にミラレーパに師事したガムポパと違い、長い時間共に遊行したレーチュンパとミラレーパは、親子のように深い結びつきをもった師と弟子であった。後にインドで教えを授かってきたことによって傲慢となり、師に反発して煩わせることもあったが、それでもレーチュンパはミラレーパから見放されることなく大切な愛弟子として扱われた。

「タキヤドジェゾンの話 後編」に見られるレーチュンパに対するミラレーパの指導方法は、歌の応酬を通して弟子の仏教に対する理解を確認し、その方向性を正く導き、その体験の内に正しい理解を生み出させていくというものであった。特にこれらの歌では、so mtsham から rnyed pa, dbyer med から bar do へと言葉を変化させていく中で、差別的な境地を越えた無差別な状況へと向かう思想の積極的な発展が見られた。

本稿により、ミラレーパのレーチュンパに対する指導方法とその内容の一端が明らかとなった。今後は、レーチュンパと同じくミラレーパの二大弟子の一人であるガムポパの思想の中に、ミラレーパの教えがどのように息づいているのかについて分析を行ないたい。

文献表

Karma Rang byung rdo rje

rnal'byor gyi dbang phyug mi la bzhad pa rjo rje'i gsung mgur mdzod nag ma. 2vols, Dalhousie. 1978. 【略号『ゾーナクマ』】

sGam po pa bSod nams rin chen

dam chos yid bzhin nor bu thar pa rin po che'i rgyan. In *dkar rnying gi skyes chen du ma'i phyag rdzogs kyi gdams ngag gnad bsdus nyer mkho rin po che'i gter mdzod*. ka. darjeeling, 1978–1985. ff.33-479. 【略号『タルゲン』】

rGod tshang ras pa sNa tshogs rang grol

gtsang smyong he ru ka phyogs thams cad las rnam par rgyal ba'i rnam thar rdo rje theg pa'i gsal byed nyi ma'i snging po. In *The Life of the Saint of Gtsang*. New Delhi, 1969. 【略号『ツェンニョン伝』】

rje btsun ras chung pa'i rnam thar rnam mkhyen thar lam gsal bar ston pa'i me long ye shes kyi snang ba. mtso sngon mi rigs dpe skrun khang, 1992. 【略号『レーチュンパ伝』】

Mi la ras pa

mi la ras pa'i gsung 'bum. 5vols. deb nyis brgya dang bcu bdun pa. krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2011.

gTsang smyon he ru ka Rus pa'i rgyan can

—ミラレーパの教示法—

rnal 'byor gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyen pa'i lam ston. (大谷大学図書館蔵外 No.11854) 【略号『ミラレーパ伝』】

rJe btsun mi la ras pa'i rnam thar rgyas par phye ba mgur 'bum. (大谷大学図書館蔵外 No.11856) 【略号『十万歌』】

Kun dga' dbang phyug

2006 “rje btsun mi la ras pa'i mgur ma byung ba'i rgyu rkyen la dpyad pa.” *mtsho sngon mi rigs slob grwa chen mo'i rig gzhung du deb.* pp.19–34.

Don grub rgyal

1997 “bod kyi mgur glu byung 'phel gyi lo rgyus dang khyad chos bsdus par ston pa rig pa'i khye'u rnam par rtsen pa'i skyed tshal zhes.” In *dPal Don grub rgyal gyi gsung 'bum.* Mi rigs dpe skrun khang. pp.316–583.

Back, Dieter Michael

1979 *Eine Buddhistische Jenseitsreise: Das sogenannte “Totenbuch der Tibeter” aus philologischer Sicht.* Wiesbaden.

Blezer, Henk

1997 *Kar gliñ Āi khro: A Tantric Buddhist Concept.* Leiden: Research School CNWS.

Cuevas, Bryan J.

2003 *The Hidden History of the Tibetan Book of the Dead.* New York: Oxford University Press.

Martin, Dan

1982 “The Early Education of Milarepa.” In *The Journal of the Tibet Society.* Bloomington.

Quintman, Andrew

2010 “Translator's Introduction.” In *The life of Milaraspa.* Penguin Classics. pp.19–36.

Roberts, Peter Alan

2007 *The Biographies of Rechung pa: The evolution of a Tibetan Hagiography.* New York: Routledge.

Smith, E. Gene

2001 *Among Tibetan Texts: History and Literature of the Himalayan Plateau.* Boston: Wisdom.

Tsangnyön Heruka

2010 *The life of Milaraspa.* Penguin Classics.

佐藤 道郎

1992 「ミラレーパの接説法 (1)」 *Artes Liberales.* 51, pp.1–10。

スタン, R.A.

1993 『チベットの文化』 決定版, 山口瑞鳳・定方晟訳, 岩波書店。

ツォンカパ

1999 『チベットの密教ヨーガ 深い道であるナーローの六法の点から導く次第 三信具足』 ツルティム・ケサン, 山田哲也訳, 文栄堂。

ツルティム・ケサン, 藤仲 孝司

2009 『チベット仏教論理学・認識論の研究 I ダルマキールティ著『量評釈』第2章「量の成立」とタルマリンチェン著『同釈論 解脱道作明』第2章の和訳研究』 人間文化研究機構・総合地球環境学研究所。

渡邊 温子

2011 「『ミラレーパの十万歌』「聖者ガムポパの章」和訳」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』 28, pp.73–126。

2012 「レーチュンパからミラレーパに伝わる「無身ダーキニーの教え」について」『印度学佛教学研究』 60-2, pp.1067–1071。

注

- (1) mgur は glu と比べて、宗教的な意味合いを含んだ歌とされるが、チベット仏教前伝期にあっては mgur と glu はほぼ同じ意味で使われていた (Don grub rgyal 1997, 338)。ツァンニョンの作品では全て mgur の言葉が使われるが、ミラレーパの直弟子であるゲンゾン・トンパ (Ngan rdzon ston pa) とシバウー (Zhi ba 'od) が文字にしたとされる *rje btsun chen po mid la ras pa'i rnam thar zab mo* ではミラレーパの歌を現す際に mgur と glu が混合して使用されている (*rje btsun chen po mid la ras pa'i rnam thar zab mo In rje btsun mi la ras pa'i gsung 'bum vol.1*)。なお、本論文では mgur の訳語として「歌」を用いた。
- (2) ツァンニョンは『ミラレーパ伝記』を、レーチュンパからの問いかけにミラレーパが答えて、自身の伝記を自分の口から語るという形式で編纂した。このことと、ツァンニョンの弟子がツァンニョンをミラレーパの化身であると主張していたことを理由に、Quintman 氏はツァンニヨン自身が自らをミラレーパの化身と考えていたと主張するが、そのようには断言することは難しい。ツァンニョンは自身ことを、カギュー派の先達者たちの意志を継ぐ者だとは主張したが、自分自身がミラレーパの化身であるとは、書き残していない。(『ツァンニヨン伝』132; Smith 2001, 61–61; Quintman 2010, 28–29)。
- (3) ミラレーパはガムボパにトゥンモなどの教誡を授けて修習させ、修習の中で生じたガムボパの体験を解釈し、更に指示を与えて修習させることを繰返した (渡邊 2011 参照)。
- (4) Roberts 氏は、レーチュンパの生涯に起った出来事を取り上げ、『レーチュンパ伝』や『ミラレーパ伝』などのような伝記や、歴史書などにおけるそれらの記述の比較研究を行なっている (Roberts 2007)。
- (5) 「無身ダーキニーの法類」はティローパ (Tilopa, 988–1069) がダーキニーから直接教わったとされる。この法類は9つからなるが、その内5つ、もしくは4つをマルパがナーローパから授かり、後にレーチュンパが9つ全て授かってチベットへと伝えた (渡邊 2012)。
- (6) そのため、『ミラレーパ伝』はミラレーパの一人称で話が語られる。このような話の組み立てはツァンニヨン以前の作品には見られないため、ツァンニヨンが作品に臨場感を与えるためにとった仕掛けと思われる。
- (7) ミラレーパの弟子の指導方法について研究が見られるが、歌の内容に対する詳細な分析はなされていない (佐藤 1992)。
- (8) *rje btsun chen po mid la ras pa'i rnam thar zab mo* には、それぞれの章の終わりに手記者の名前が記されるが、ツァンニョンの『十万歌』の章では、ほとんどそのような記述は見当たらない。例外的にツェリンマについての四つの章にのみ、手記者の名前が記される (Cuevas 2003, 54)。
- (9) ミラレーパはガムボパとレーチュンパ、シバウーの三人に夢を見てくるよう指示を出した。レーチュンパは大きな三つの谷を訪れて、大声を出すのを夢に見た。ミラレーパはその夢を解釈して、「お前は頑固なため私の言いつけを三度破った。そのため三つの谷で、遠くまでしられるゲシェーに三度〔生まれ〕変わるだろう」とミラレーパによって授記された (『十万歌』196a)。
- (10) 『ゾーナクマ』ではレーチュンパがインドから戻ってきた後の出来事であり、話の題名も *brag steng rta sga sogs kyi skor* となっている (『ゾーナクマ』f.508)。
- (11) 大谷大学所蔵の木版本の標記。青海版では、*rkyan med du bslu bslu 'dra bcu gnyi* とある。また『ゾーナクマ』では単に *bslu ba bcu gcig gi mgur* と記されるが、歌の数から考えて *bcu gnyi* の間違いと思われる。
- (12) 『ゾーナクマ』では、「私の間違いがわかる、どのような考えがあるか試されているのだ」と、レーチュンパが考えているのは、自分一人についてだけである (『ゾーナクマ』f.487)。ツァンニョンは所化を仏の教えに向かわせるための、一種の模倣すべき手本としてミラレーパの伝記と歌を編纂した (『ツァンニヨン伝』68b; Don grub rgyal 1997, 45–48)。そのため、ミラレーパの問いをレーチュンパに限定せず、読者もミラレーパの問いを自分に置き換えて考えることができる

—ミラレーパの教示法—

- ように表現を編集したものと思われる。
- (13) 『十万歌』の「金水の数珠の歌 (mgur chu gser gyi phreng ba)」に中有についての歌がみられる。しかし、ここにうたわれる中有は「タキヤ・ドジェズンの話 後編」でうたわれる中有とは異なり、ナーローパの「六つの中有」の考えを踏襲している (Back 1997, 93-95; Cueva 2003, 54)。ツォンカパの著した「ナーローの六法」に対する注釈書にも、「金水の数珠の歌」の言葉が引用される (ツォンカパ 1999, 164-165)。
- (14) 第 59 回チベット学会で発表を行った際に、立川武蔵先生よりご指摘を受けた。Blezers 氏はミラレーパが中有という語句を限定せず自由に使用している例として、D の歌と次のガムポパへの歌を例にあげている (Blezers 1997, 28)。ガムポパが「諸々の中有において、教誡を簡単に実践する方法を教えてください」と頼んだことにミラレーパは歌で答えるが、その第一連では、「一般に、三界を輪廻する有情と 涅槃した仏の二つは 本性として一つ 見解の中有はそうしてください (spyir khams gsum 'khor ba'i sems can dang// mya ngan 'das pa'i sangs rgyas gnyis// dngos po'i gshis la gnas lugs gcig// lta ba'i bar do de la mdzod//)」とうたう。ここでの中有という言葉も、「A と B の間」という意味ではなく A と B を包括した状態、差別を越えた無差別の境地を指していると思われる (『十万歌』195b-196a)。
- (15) 『ゾーナクマ』では D4-2 は, rnam dag dkar po'i sems las med// (『ゾーナクマ』f.490)。
- (16) レーチュンバがミラレーパのもとを離れる時にも、ミラレーパは、「息子よ、見解は偏らせてはならないよ 修習は寂靜処を旨とするのだよ 行は悪友を捨てるのだよ (bu lta ba phyogs ris ma bye ang// sgom pa ri khrod zung cig ang// spyod pa grogs ngan spong cig ang//) [後略]」と見解・修習・行について語り聞かせている (『十万歌』250a-250b)。
- (17) ガムポパの『タルゲン (dam chos yid bzhin nor bu thar pa rin po che'i gyan)』では師に親近する方法として、「恭事と服侍を通じて、信解と尊敬を通じて、修行と勉励を通じて (bkur sti dang rim gro'i sgo nas ji ltar bsten pa dang/ mod pa dang/ gus pa'i sgo nas ji ltar bsten pa dang/ bsgrub pa dang nan tan gyi sgo nas ji ltar bsten pa'o)」と説かれる (『タルゲン』f.78)。
- (18) ras chung pa nyams myong mtshan nyid pa de yin/ slob ma snod ldan bya ba yang khyed la zer ba yin te/ bla ma mnyes thabs gsum las/ dang po dad pa dang shes rab kyis bla ma mnyes par byas/ bar du thos bsam gyi 'jug sgo ma log par theg pa chen po sngags kyi sgor zhugs shing/ nyams len la snying rus bskyed cing bsgoms pas/ tha mar nyams rtogs khyad par can rims kyis skyes 'dug gis/
- (19) 現在でも、ニンマ派やカギュー派などがゲルク派を批判する際にこのようなこうした言葉がよく用いられる (ツルティム・ケサン氏の教示)。
- (20) da kha bshad thig gi lo ma la ma dga' bar/ don nyams su len phyir byung tshad kyis kha nang du bltos la sgoms shig/ nga la yang bla ma mar pa'i zhal nas/ mdo rgyud kyi shes rgya med kyang rung gis/ tha snyad kyi tshig phyir ma 'brang bar/ kha nang du bltos la bla ma ci gsung gi bka' bzhin sgoms shig gsung pa'i gsung khyad par can rnam ma rjed par nyams su blangs pas/ 'khor ba la blo log pa dang yon tan 'di rnam rgyud la skyes pa yin/ kyod kyang nga'i bla ma mar pa'i gsung bzhin gyis shig
- (21) レーチュンバがインドへ求法の旅にでかけた原因は、ミラレーパが論争相手に対して理論的に答えなかったからである (『十万歌』156a-156b)。他にも、ミラレーパが施主の質問に答えてうたった歌で「黒い文字の経を見たことがない」とうたったことから、ミラレーパは学問が不得意であったのではないかと推測できる (『十万歌』77a; kun dga' 2006, 22)。しかし、ミラレーパは全くの無学というわけではなく、マルパに師事する前には他の師のもとで教えを授かっている (Martin 1982)。一般にカギュー派では行が重んじられる傾向にあるが、しかし、このミラレーパと論争相手とのやり取りを見ると、ミラレーパが無学であったというよりは寧ろ、学問を行なうことによって陥りやすい過失を見抜いた上で行を修行の中心に据えていることが分かる (ツルティム 2009, 96-98)。